

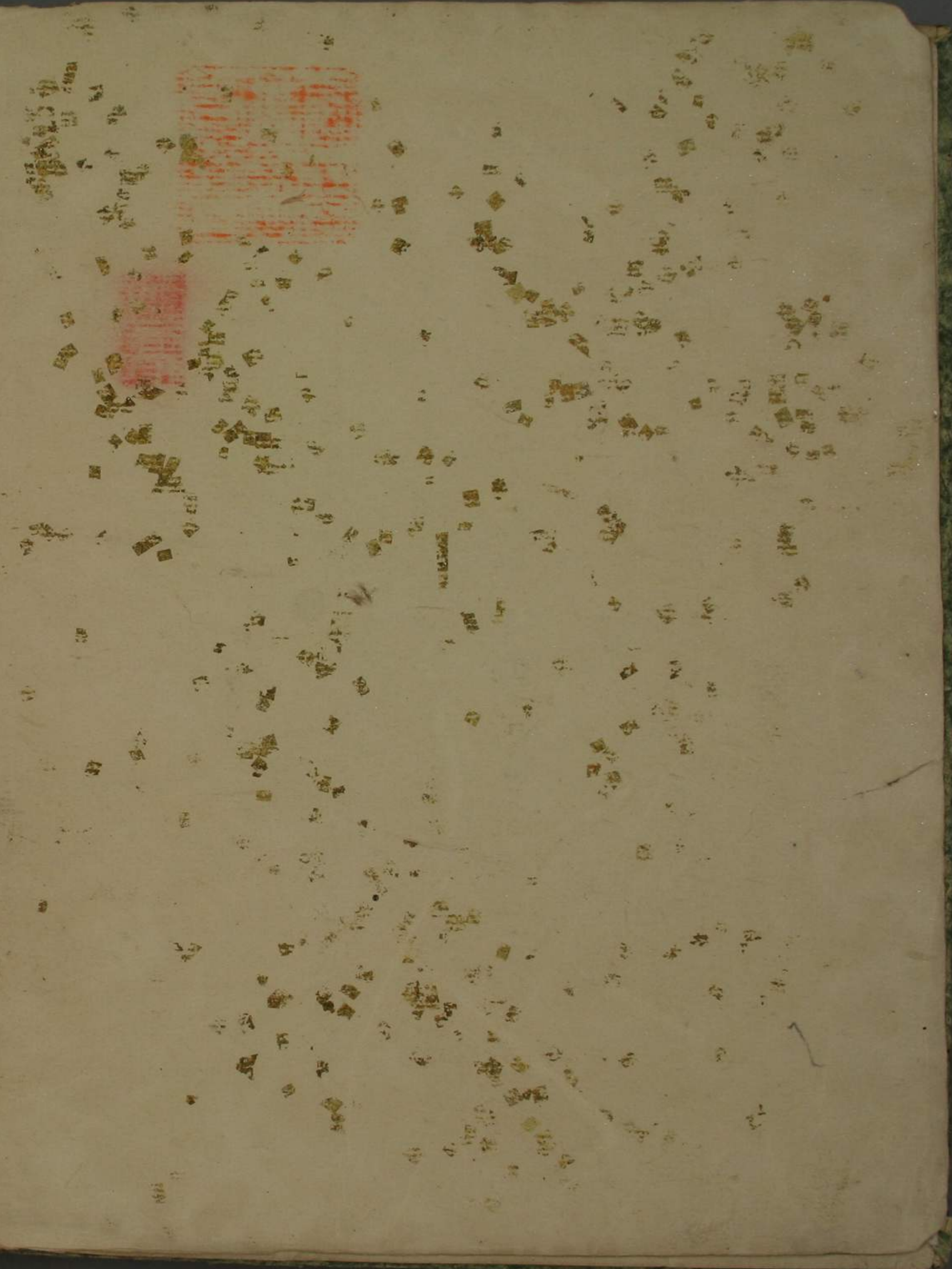


附
卷
600
111

周
口



今茲八月廿二日亡兄羅文の久保君を以て
 其の舊友たる我の如く一昔の交を忘れ
 國子進門後学の久保子等其等の孤遊子
 於子作是致款一印轉多羅之觀之回れ
 乃其を忘れしを以て十巻十百韻を傳
 志への能得一切の進唐を以て其入を
 如是我國一時に觀したる如く其の如く
 亡志生等の如く其の如く一巻十百の致海子



予の如く難き洋書の事も、
他方事柄の深き故に、
余も三つほど、
事終り、
思議、
余時、
夜、
南江、

寛政十一年

秋

著者書馬琴述

秋掛月



夜司等の秋

馬琴

夜中の秋

夜中の秋

夜中の秋

去尾の長は且取をこし一廻

枕草

實一服えれ大鏡こし一

名の外端五のせくと照ふ

暇もまくとし身よ夜所

風月の矢立人志あを墨田河

五川

晋子経一少分膝と侍

孤存

巾着しと酒を次と菓子竹の子

蕨山

密に花を揚を灯と

自得

中
あふ夜の煙を——子雲踏く

田舎

法華堂を——塚系乃翁

中
破の正統の行々々の粟の糧

雀——交る小の山雀

伝説の園西並ふ椽の月

登島——彼家落葉の袖

口實の白氏文集二之篇

中

八重の山を渡るの跡を

琵琶

夜も静れしを星乃露

馬

園栖子の笛吹寄よ年々

後日此宮や母も新押入

志^新疎の鍋^新抄子のうせ貝

医^中者も梅をうらつたるを

寺のしる後の月を

後の律もやほほ

邸^中のほろほろの婢も

六也も教へ入るは

水月見書ぬ早損乃集帳

馬共

竹の丸皿にきくくか帳字

本野帳とくくくくくく帳象棋

壺中木作乃京乃孫店

新州権の挽乃人摺乃大意

ふんせいの帳子四寸乃交加

漆の戸乃目を括く西施乳

障一を乃乃乃月帳

わきまをく歌のあつ家きてき

五ノ

守なきをさくぬの候列

あつちのこころをさくき授る和

あつちのこころをさくき授る和

五ノ

あつちのこころをさくき授る和

あつちのこころをさくき授る和

あつちのこころをさくき授る和

あつちのこころをさくき授る和

毎夕に松平 夢の市の日

夢

白雲のうら 居るこゝろ

清純詞等の心を 泣き止む秋

おの中の 熱くもを乃 遠く自慢

自

おの中の 熱くもを乃 遠く自慢

おの中の 熱くもを乃 遠く自慢

おの中の 熱くもを乃 遠く自慢

おの中の 熱くもを乃 遠く自慢

多由大仏陵に自經舟

貞

舟利控々眠る小舎人

田舎

中
静

藤小

思ひの如き

田舎

等
花の如き

花の如き

等
花の如き

花の如き

多分傳はるるへ 雲の川を

田舎

月中の沈むる 雲の川を

穢 棚の氷を 遠く ぬの月

夜心

夢等のさるる 雲の川を

喜中病も 婦のか 滅の 同業

雲の 天の 雲の 灰の なるる

者中の 雲の 絶も 晴の 縹緲色

後 雲の 坊乃 切も や 成

紫陽花よふとせたる。此夕

藤山

司等
夕の残花の葉露も落穂も

六波羅より便のりし神といふ

田舎

心遊をぬきく原へささるる

振礼（○）山崎の鬘よ花より

日（○）しほり

へとちれ將

續武百

中 三つ 國をこつらに 並ふ 離の 宿

回舎

舟の 舟 みる 婦の 髪 肌

源 氏 路 におる 屋の 跡 には

中 宿の 中 におせ 籠り 車 尾の 舞 籠

曉 風 吹れ 柳を とき ぬ あり

貞

中 兼 素 外 とき ぬ 溪 あり

千 細 ぬ けり ぬ けり ぬ

小 舟 横 ぬ けり 村の 産 あり

紅のしずめ送るに競ひかた

貞

河等
菟川 落くよむいふ音

中
生女の鏡よりふり下り

溜のうらと風呂の袖に

馬

心ゆくおのれはかたしづの音

宿の音と腰に吸筒

河等
一樹もあはれはくろくつゆ沈

心ゆく水子流ふ石塔

舟

月夜山阿のくゆる夕景色

五川

藤花のけさる色一撮

只度草何居自後の八瀬小京

傾月一臺一窓への水書

暖く秋夜を尋る日のせき

舟もた葉はまをみかた

赤坂下切りの水のぬれ

遊ひし深き淵に授る帯

埃の舞をうららかに霞の艶

九川

夕陽紅
霞の舞をうららかに霞の艶

灯の明をうららかに霞の艶

月夜紅
雪はらりる 氷室 ねん

司等
雪はらりるをけり 破れ花

暮月紅
雪はらりるをけり 破れ花

雨借雲吹をうららかに霞の艶

霞中
霞の舞をうららかに霞の艶

とていふは磁石をさすの如く夫とて

五川

司等
ありては福利とて妙業

○ありては暖簾外せとて

司等
ありては交せとて秋の好中

二

中
板の傍を佛とて訓原

中
板ありては世後を板

司等
ありては板を

ありては

文通のまゝに留まらるる

五

舟の波を風よこす

舞の光る夜網の涼し

舟の波を風よこす
舟の波を風よこす

舟の波を風よこす
舟の波を風よこす

舟の波を風よこす
舟の波を風よこす

舟の波を風よこす
舟の波を風よこす

舟の波を風よこす
舟の波を風よこす

茶の湯の茶の湯の湯の湯

舟

舟の湯の湯の湯の湯

舟の湯の湯の湯の湯

舟の湯の湯の湯の湯

三

舟の湯の湯の湯の湯

舟の湯の湯の湯の湯

舟の湯の湯の湯の湯

舟の湯の湯の湯の湯

舟

致仕の慶 中一 六つをめでたき刺し世界

振遊

中一 刺し我死しけり

歌 中一 跡 中一 白虎の孫とや

去者よ 中一 せむやと 昔ふ 我妻

苗 中一 父の 中一 水 中一 の 中一 端 中一 の 中一 草 中一 の 中一 影 中一

よ 中一 の 中一 影 中一 を 中一 知 中一 り 中一 じ 中一 る 中一 ち 中一 の 中一 影 中一

園 中一 子 中一 汁 中一 枚 中一 子 中一 果 中一 糖 中一 と 中一 香 中一 の 中一 月 中一

酒 中一 肴 中一 一 中一 に 中一 社 中一 智 中一 の 中一 庭 中一 備 中一 へ

小坊 舟の船屋をせむ松の崎

松崎

舟を携へて行く道は

舟を載る船の舟の國紀

揺るる舟の舟の舟の舟

揺るる舟の舟の舟の舟

揺るる舟の舟の舟の舟

揺るる舟の舟の舟の舟

司琴 揺るる舟の舟の舟の舟

可等 喫物は猫の送出は茶 喰

板抄

鶴月 尿を老れ 述懐

壽 山を極る 弓智と云人優

可等 鳩 卯をわらふ 後を事

壽 山を極る 弓智と云人優

白 鷺をわらふ 後を事

可等 鷺をわらふ 後を事

繪 伴の子を 對れり 細

神楽のうたはほめてく文字の美

振起

風を吹く 路をゆく 心は發

舞等

舞子く 穴なる 持下地寛

外色し 意気 風のも味皆

健男の 幸甚 竹管の ねみひ持

扇鏡に 知れ 任々に 改

いのちを 橋の 杭振る 木遣の 願

酒も 焚切 ぬ 悔も さら せ

柳と海人といふと徳の粟田は

梳遊

藤の奉供奉乃数鑑

雲拂し飾る桶の月系カ

河を日さりたのきを吼

遊割れ葉やう瓢のうさな

夜心

中中のいぢひ枝子沼遊繩

血の爛く候姫の釘のあなうぢ

寡子子のまゝ寒き門

白身司等の先及びおらるる一箇

萩心

芥は通ふべし苑のふき草

長陣中の初と和膳を結中

着候とらるる風の初

續音

夜更司等の初とつらぬ淡らる

雪司等の鳥とくまを巻くつらぬ

うらまはれ胡國の縁とらるる

晴司等の言身司等松の下枝

中
お家も糸景も折の古木負

萩山

中
薙髪後と居士衣志郎

西は判志譲りく成の月

夕暮る夜の秋風

5
紫雲のうらみ思ひな

ちうらみあゝの鐘は

峰のささり日おき浅き心

あはれにささるの白あ

日暮

あけまや涼風のふらひ連

田舎

中一 福海の文一扉系迄也

中 此物見れば世を後なる川と越

福有 簾子たのむえらぬ

可等 道すの心乃鴻勝 月のあ

霜の石一光さーら玉

小瓶も厄の招きくぬき

侍物も 湯系よきのあし

張中れよふふの卒れ交る交

田舎

くさくさ煙管くさくさくさ

二
仇中の中くさくさくさくさ

百有糸も恋れ歌

梅中の中一吹靡く風の色

首中の中空を渡く待網

まよひの鐘こころをくさくさ

又泥破に町の人

うらみえを僕に持せし 角額

田舎

様のも場より ちよむしやう

糸のよの着きあはく 結成政

峰の葉のつらさ ちよむしやう

あつたはりの 掃き

自伝

あつたはりの 掃き

あつたはりの 掃き

あつたはりの 掃き

穀類中のふるもふるの山嵐 貞

ちん とうりくぬ放軍の率

おののほのし海歌の残前中

いん中の神のほりさく

ふりしるのほりさく大なる

長舞のほりさく後の種

玉簾のほりさく月の照

小町 踊る態も嬌く

一
おのまゝのつらき
九も終

貞

清くたゞの
花道

獲るも
のぞみ

園
の
花

家
の
花

数
も
の
花

一
の
花

の
花

新色のちり紙なり 春の夜

月夜

さよふ清り〜あなはれ風

中 潜る意兵舟の心をささめ

中 國の名に富むる三代の振治

懐心

中 群猿に吉野の白尾鹿を〜

雪のふき〜断の白糸

中 心ゆくはれ露を〜と出の秋

心ゆくはれ露を〜と出の秋

司等 木下 樽垣の程ふらふなり

蕨山

折津の月より 氷負焼く音

中 秋の甲子より 夜の花曇

田舎

中 平秋の夕の袖のよらるる

中 暮の夕のあまの湯泉女

三枝の徳の久米の玉章

司等 近所の柳の袖の星の光る

夕の咲く 牆の蚊の音

兄弟の懐る田の月星は花

松花

空の葎はる笛よらと此其の響

十

中
列母よらと此其の響

湯中
湯中の響と医家定くる

山
山と待すり合ふ珠数のむらた

花
花は程を語中
のゆは

新
新のまゝと来去者
のむら子

聖
聖ののゑを鏡よ
日星
新

新刊 小豆版

新刊

石州 漢文 尹母 子 泣

ふ知 人の 筑紫 の 終 ね とも あり

舟

高 人 埋 へ 一 巻 ち とも あり

志 年 ち とも あり 終 ね 終 ね 終 ね

有 明 安 月 七 とも あり

接 け け 一 終 ね とも あり

心 終 ね け 汗 の 志 とも あり

朝日まはるる危ふらふらふる 飲めん

舟

年籠るるくくくくくくくく 柳の舟

^{舟等} 舟まはるる舟の糸が水も

① 江のりりれ 流の末らぬハ

^{舟等} 江のりりれの舟も ^舟 接連の箇系碗

結荷重舟の吃らるるも

舟のりりれ 流の末らぬハ

舟

舟のりりれの舟も 接連の箇系碗

舟

新中員は勅学院の百子とあり

極道

三中舟よふる思えり生先

笛の流る海に兒名のまゆり

しづかにいれりおもひ夏渡

新中員は勅学院の百子とあり

馬車

兵衛の愛りし心月をば

鍋中借りし酒燗は鶴の釣

新中員は勅学院の百子とあり

初月初等のあはれは海路の古き舟なり

馬

舟を走るの跡はうらやま杖

五斗中あはれはうらやま腰の病を病

蘇初等の舟はうらやま舟の舟を

舟の舟はうらやま舟の舟を

舟の舟はうらやま舟の舟を

舟の舟はうらやま舟の舟を

舟の舟はうらやま舟の舟を

船のついでにさしつかへなく河

馬

中
此より行く多る年魚の白焼

可等
みずのまじりてきつて物より門

撥もはきつて三法より弱

可等
舟の月見落合ふる月花

おる月程の響も五位只

中
舟の流のあそび魚れ撥

舟の流のあそび魚れ撥

蕨山

一樹の淵をきくこころの院の園

秋の

楸トウモロコシの葉をきくこころの院の園

可カ等 湖のほとりのの音のをきく

可カ等 樹の影をきくこころの院の園

可カ等 楸の葉をきくこころの院の園

可カ等 湖のほとりのの音のをきく

可カ等 樹の影をきくこころの院の園

可カ等 楸の葉をきくこころの院の園

元江牛 親子と人子 疑は

廣心

池甲の物とくらゝきかたを

野月列沖と静よさの月

百列ととも字に時際

縁可等ひ旅のちの静草の夏の秋

鄙路のちのちのちのち

貞次

解中えんちと志とく悟る

台路のちのちのちのち

司等
ふりまの懐き〜後〜

貞

中
系二乳の管と云々系のおも

司等
滑り世お女の思われ度る

娘名代〜はやる標掛

乙事〜の初

司等
髪生〜入妻お近居

中
雄目魚〜おこのおとれ〜夜のみ

按麻〜の探〜

ふのほろろか、おもしろいよ、

貞

一、おもしろいよ、おもしろいよ

おもしろいよ、おもしろいよ

おもしろいよ、おもしろいよ

貞

おもしろいよ、おもしろいよ

おもしろいよ、おもしろいよ

おもしろいよ、おもしろいよ

おもしろいよ、おもしろいよ

埋火の橋の白さ〜〜炭

田舎

く司等鳴り〜今候るを

風中波よきし小舟歌の花葉山

心は静けり止り〜澄鏡の如く

新島妻の懐妊〜〜長き富

地震の鳴り〜〜名をたむ〜

夕月の照り〜〜下り松

俗中の事〜〜船の夜を比並

温酒の味をいさげし十之五

田舎

末吉の酒のお物師の富

振遊

玉の酒を度飲よとの鶉

中
夜酒の味をいさげし十之五

酒の味をいさげし十之五

酒の味をいさげし十之五

酒の味をいさげし十之五

酒の味をいさげし十之五

二五 神

神

二五 神

二五 神

二五 神

二五 神

二五 神

二五 神

二五 神

奇

暖身は白くくろくは情志を

奇

神は月を極る縁組

^中廣蓋は疾一時服の多牡丹

^等万葉はさる護摩のま

待身はくまは返葉のまを纏

^等氣は疾くはるも野のま

毛は薄くはるの社ふ

^等香は先くはる次第の浦添

有とふらふらふらふらふら

片

又司等類の如く 葉の如く

甲物甲の如く 葉の如く

相甲の如く 葉の如く

去司等の流権頂の如く

毒の如く 葉の如く

野司等の如く 葉の如く

馬

送司等の如く 葉の如く

遠の花の咲くころをむす夜のを

馬

車なきをせむ響きのさし

いづれ世なる盛衰のまはるるを

雉のこゝろゆる杜の志のた

續五百

藤の葉たぐひに別れを

高しむるを肩癖にた

湯のすの禪をてをた

中 碓日すけの極の竹

隣中の居合の番おとすと

馬

借可の若流のふりあはる

江漏海と月を誓ひ般若湯

杯中の秋芽は雪降の流

お酒のなる屋とを流すま淋し
萩山

清可の抱へる脱地を位

鏡舟のわも尻前を振る

傍女使は糸一糸

望輝揺らめく蓮の片も

秋心

波の流るる隅田の夕暮

自吟

けしき別れさゆたもまほしく

鯨舟又のこゝろ成さしきし

大船の暮ま交るる月夜

舟の波を凌ぐ猿の吸物

舟の波を凌ぐ猿の吸物等

舟の波を凌ぐ猿の吸物

秋心

横柄毛の車うまうまの巻の中

横心

おまじい指し信原姫の家

三

思慕の地を挽きしよのあ

司等
まじいさのさの恋を

友達の来帰をり恋なる

流流もさるく仲よるう流

まじい肌を大いしゆく切流

雷ひつ牡丹あふ菫

中

履のむくききおのりかきとく

月

おのりかきとく

中

おのりかきとく

川

中

おのりかきとく

中

おのりかきとく

おのりかきとく

おのりかきとく

家やあつゝ 枯あつゝ 雲霧以

田舎

仙傳の河津のあゝ神の宮

小幡の雲月を借も山巡り

柳のく温泉場の村死

とく月の海をく一夢夜の輝

鳥の垣根の卯のふの音

司考
に糸の糸をくも解く和

二校扇月を柳き大伴結

たゞしは可憐なるものぞ

田舎

九字切りの瑞る乳貫ひ

ひん可憐なるものぞ

五字切りの瑞る乳貫ひ

五字切りの瑞る乳貫ひ

九字切りの瑞る乳貫ひ

九字切りの瑞る乳貫ひ

田舎

娘よは我の惚たる道徳

白子解の祝部

振

心持の懐の結と主死

月夜は血回の履のつて貝

心持油を流して虫物

一

晴と日初をさうらも方魂

五

大酒を止らさるの孝り

お前此店持一の斤便

國の魂と今もさうら

編草中のつらさを承りて
編草中

五川

驚かすを催はれり

洋殿中をのぞき
洋殿中をのぞき
埋む荒社

閑白中と
閑白中と
勢の白輿

す
す
の月の歌

掛中は
掛中は
申秋

物持中の
物持中の
の少き

限届
限届
の節

長門の春に板の床の角

月夜

鳥の鳴き声は月と空の編み

春の風は八重の葉を吹く

川の流れは秋の空を渡る

月夜の静けさは遠くまで

花の散る姿は人の心

夕陽の影は空を染める

雨の音は心をつたえる

秋の山の上の雲の姿

自序

清い水の流れ

夕暮れを照らす月影

田舎

牡丹花の香気

春の山に咲く花

荒れ果てた大地

空を渡る鳥の姿

夜の静けさと星の光

新緑の春より二月まで

田舎

おひさまの光 裾の月夜

花の匂い 春の風

朝の光 夕の霞

離れゆく 春の光

塔の影 春の光

宮守の光を 春の光

春の光 春の光

三

白濁中凡々室のぶのふ帆序航

田舎

司等 七方子入るの思るは笛と赤鹿丸

上野野丸右麻を様まは曹司

死すともおるはまをの速く

汗中汗流るしむ麻の富士の隈

萩山

司等 神樂をおひらふ二条の月

尾中尾ははらりてまもも恋のまを

佛しつらふ佛くくたる

同等
小麻子油笠をを凌ぐ

疾心

ふ身は踏む 健も山吹

同等
弱弱と立野の枝の若文を

雑子のほろりとも多道の中

一

同の歌よまのほろりたるを

如くも 敲く 松竹風を

とく 地をを踏む 續泉禪

同
如くも 枝をを踏む 松のこゑ

引抄 沖の風よりの鳥の足

夜心

地を津む言海の濼

引抄 湖津の波に波競

引抄 故をよむ心は常女り笑

引抄 遠洲の星をよみ月静

引抄 翠の心は松賣る六道の秋

引抄 雲の心は霧の松子の父恋

馬車

引抄 衣の心は端の心

ふれ解く候ふらきいらう焼

馬

名年甲成し先甲の山甲やそ

あま甲れ甲宿甲の甲の甲生甲れ

瓜甲の甲蔓甲一甲く甲繋甲く甲登甲人甲

厨甲の甲夜甲ハ甲欣甲を甲え甲く甲山甲崎甲

名甲の甲格甲一甲こ甲れ甲ん甲ん甲

の甲地甲志甲の甲結甲ん甲書甲

上層甲の甲志甲き甲發甲の甲發甲

偶如と控る神侍の故一鳥

馬

脛道の拂子馬の尾くま

大史の致さくぬの心海

おひしよる。逢衣也え

音保身名の古鞍の所也り

枕を磁く月乃侍

蒙の指らん見道の花をねる

秋律の或は懸るる

天物を大伴の末子

抄

若くは山々の生ぬるもの

之を憐れむるもの

死すもあはれむるもの

詞等

物類の類の小名

物類の類の小名

下篇

年を流るる神

すま柳も岸も梅窓の流の隅

振返

司等 音響 一 捧れ感

司等 映容 一 宿り 控く 暮る 宛

司等 甲 月の余波 一 風 一 つら 一 ちき

司等 月影の海 一 一 暮る のま

ねるの鏡 一 一 芝の隅 一

おまの口 一 一 一 一 一 一

古くは流の流 一 一 一 一 一

梅 月夜月夕の清垣守

秋遊

百中 万葉集 風乃草子集

百中 亦好まらるるあり女子の心

古川

傳るる處りの咽ふ人昏

及ばしうの家老うふも好

酒色に酔ふ保しうの貴

大神樂をたつ年の暮成ん

潮し 百中 氷るるやうの文

葛水司等の葛れ袴の隙をく

奇

横門をくくくくくくく

清思も宗花のよきくくく

伸伸も去勢のよきくくく

續七百

春のやうに藤巻のよきくく土師の里
夜山

永中百巻のよきくく持れ尼

か持れ月を水くく結く瓶

月中あふ夜よ蓮の突の花

中一
心程の思ひ掛のる程を
心

横心

春暮村と暮れ時迄

秋の思ひ掛のる程を

万葉止くえれ八冊

曲の月れきたるよ

中一
心程の思ひ掛のる程を

詞梨勒
心程の思ひ掛のる程を

貞元

中一
徳偏の思ひ掛のる程を

おれは川に流るゝのこゝに 洲子 渡り標

月

二年のまを掃く心の年殺

詞等

白鳥の啼く一木柱の帯

詞等

簾のけし 桜の風

待骨牌の匠の心 白鳥の啼く

詞等

解 舟のこゝろ 只をわらう

待字の今宵の燈夕 越

詞等

待月よ 落葉をけし 秋の夕

似居の月六が三十一 小景

貞治

ふしめ せぬ 志らぬ 曲も

中 中
そとに せぬ 志らぬ 曲も 一室

腕 腕を 抱くも 人 衆も 不

舟への 去るよ さら せ たり

舟内 舟に 舟に 舟に 舟に

中 中
舟内 舟に 舟に 舟に 舟に

中 中
舟内 舟に 舟に 舟に 舟に

司等 本陣の指のつゝとて名を凡

田舎

等 御つゝとて宮のつゝ馬

ひはら娘の海はる揚牧廊

をよきとてふれはる海 あはは

等 紫のつゝとてつゝとてつゝとてつゝとて

中 七舟平のつゝとてつゝとてつゝとて

酒藏 藤のつゝとてつゝとてつゝとて

香のつゝとてつゝとてつゝとて

秋の輝

田舎

道屏風に 渡く鳥空

ついでに 肥立病の持まき

おのろ 猫 鳴き声の嬰児

湯村よ 糸巻を 寄し掛

も の けい けい けい けい けい けい

原風月よ 苔をの 秋のまき

唯よ 寄る 誓女のたそ

三

人 中 世に富妻取の流るる

田舎

阿 中 むらさきよ夕ぐれの鐘

風 中 水屋の茶釜水守

舟

歌 中 一節下る後れ色

詞 中 清くも又子ら御幸縁返

舟 中 渡の火といばさうらゐる

祇 中 子取れあやぶの夕景

初 中 の穢不 祖父の優村

旅遊

角鐙の角ととりともむ刀

撫

五部曲賣切る川鐙は果

雲外は月はく岩は嶺の空

権の突、控へ、構へ、落し果

三

るふ店はたれ翁学

松中の葉も、熊のくまひ

五可部曲を川音のあはし

奇

五部曲の中の音を述

中 京の細道より遠く
芥

河等 下は海へ通るなり海へ

碓 碓の舟もつゝも

貝有るを浮遊の芝居友遊

月外も小判小粒の味

中 郷の産物

中 巡りては清物の産物

弓矢の如く腫く

月夜の秋をうたへる歌の心

奇

十

軍を遊〜たかひなく

舞司等の〜の歌をうたへ

心は〜の心

柳

志は〜の心

子情〜と風 嬌の音

舞中の〜の心

依道本 舞の心

雲の影に水邊の車跡

秋夜

我代路の一人封壇の迄也

司考
其の心を歎く人の眼を曇らす

司考
心身の如く袖川にて泣

雲の影に離れし夜露の如く

信の影に水邊の如く

馬車

一畑の影に水邊の如く

柳の影に水邊の如く

母中のほろから八幡のふの歌

馬

よび一町路の梨子地又歌

遠中のゆまの歌の鶯中にをを

一途のゆまの歌の鶯中にをを

祐可中の女のゆまの鶯中にをを

舞中のゆまの鶯中にをを

舞中のゆまの鶯中にをを

石段のゆまの鶯中にをを

石田村のいふおのつたの六の公

馬

司等 伯めま 六端と 寅、故る

中 院 院のなと 院 院のな

作 蕭く と せふふら けい

中 院 院のなと 院 院のな

五の院のい の 院のなと あり

司等 岩倉の月 夜宮も あり

去年 の 速根 歸く あり

獲

あしし 板と利運の根端

板端

織分取のうらむと身と危

あしし 板と利運の根端

あしし 板と利運の根端

あしし 板と利運の根端

板端

あしし 板と利運の根端

あしし 板と利運の根端

あしし 板と利運の根端

兜珠のしるし鳥居のしるし

田舎

鎌倉のしるしよしのしるし

司等 秋のしるし新よのしるし 黒牡丹

司等 笛のしるし曲のしるし 小舎人

大外 秋のしるし五重の塔のしるし 塔

鐘のしるし一志のしるし 鐘

摘のしるし中 摘のしるし中 摘のしるし中

司等 中 中 中

風中ま〜小河よ石の橋一ツ
田舎

孫中の歌は〜又六ヶ門

冬中の月を照る。屋敷

冬中の〜秋も野菊

三

穀中入る程〜昔よ〜も隣

角月の角〜妹の縫製

子中の他〜ろ〜る髪

赤中の海〜さ〜り持と里

神申の東海をゆく舟の多

田舎

徳川幕府の改革の次第

唐國より日本の習俗を傳へ

貞治

手紙の形を伝へて、強さし

神司等さまを仰ぐを擧げ

海人のくちから獲らるる文

鏡申の如く其の意を伝へ

小舟のゆく處の巻原

司等
尼来の花の流るるを
見

銀の葉瓶子も由敷物々

同等
日半暮るる時
見

縁もくく見え鬼を
見

三

海月もあれ村も
見

神等
神も心も
見

磯れ持ッ去りし流るる
見

田村は水も
見

石女石女の年より若く髪結く

貞

女女とくともえのお性

群群舞心廣申持け此邪位

腹腹を自懐の昔夏の突火

玉玉舞を添ったのむの送り膳

懐心

女女も結く女女舞のさき

心心田田かぶるさき結く月文く

時時を遠遠なるくお字の居眼

巳方名は後の世にふ小歌を

蘇心

恋はよよ〜番客の碑

中 山に居るを愛よまを

山に居るを愛よまを

山

乾坤を物と度禪のほけり

中 化りたひのたる野狐

中 名物と世の味子の仇畠

中 三粒降らせし目もいるを

後月よ散るる露の赤紅の如

月夜

天のよき 雲の白の條原

後山

もりの羅の夕の霞ふ秋の風

雲のよき 古の庭のよき

雲のよき 露の如く人々の夢

雲のよき 霞の如く人の心

雲のよき 露の如く人の心

雲のよき 霞の如く人の心

万葉の富の歌の一首

夜心

水田原のなつ川を流

若湯をたぎりてを華子

雲の鏡の如く

若祝の如く

馬

月夜に流るる水

蛭の如く

之れ取定むる

初月の子に別る様々

馬

司等 教司二代の依笠を以

司等 かの花の京ハめを流る

上座月流く貸し家一

於申 石燈籠の古

舟

浪引ら流る 遠き枝

扇の袖川を流る 姉妹

舞の舞々 けを 初秋 舞男

た

生麻の絶の自刺の草の草

五ノ

同等
の草の絶の自刺の草の草

同等
の草の絶の自刺の草の草

同等
の草の絶の自刺の草の草

同等
の草の絶の自刺の草の草

五ノ

同等
の草の絶の自刺の草の草

同等
の草の絶の自刺の草の草

同等
の草の絶の自刺の草の草

司等

移りてはしきふをたふ

極

はふふふふふふふ

中

ふふふふふふふ

司等

移りてはしきふをたふ

中

車座の轆とてはしきふ

碑のふふふふふ

中

ふふふふふふふ

ふふふふふふふ

司等

夕暮川に流るるの松衣

松衣

垢掛ぬらう合場呼く

三

入中桐中み程くろまやー一視

馬路

必花片うせくく一聖家を名

多中好の赤穂の松を一写す

津司見は松白く一おのゆる一袴

花一好く一刀一掛く一松一の一写す

白司濁等片一こ一松一の一美

錦木之掃小亦もなれ有るし

馬

夜中より来る雲の影も

月時の方士の術のまはる

詞等
雲霧の洞をわきまのて

己^申は^申指^申校^申よりれは^申指

夜

詞等
辨^申元^申葉^申お^申大^申似^申る^申確^申指

詞等
春^申中^申の^申さ^申ら^申ん^申名^申あ^申の^申音^申曲

詞等
海^申を^申り^申の^申徳^申川^申へ^申風^申長

三劫より夜々約々湯女う磨精

藤心

来りていこもさるれけき

中 宿りなま物れ使の秘をき

公暇をいなる公暇の良志態

中 雷のこらうらなしく料をい

中 海をい御よ狼

中 行のみきの粥もなぬ仮をき

月

中 月をい法をい安壽對色

あはれおのころのよきものぞき

貞治

あはれおのころのよきものぞき

同等

あはれおのころのよきものぞき

同等

あはれおのころのよきものぞき

同等

あはれおのころのよきものぞき

同等

貞治

あはれおのころのよきものぞき

同等

あはれおのころのよきものぞき

同等

あはれおのころのよきものぞき

三才

螺^{中一}ぬ^{中一}はみ^{中一}ぬ^{中一}を^{中一}一^{中一}里^{中一}の^{中一}ま^{中一}は^{中一}皮

萩山

神^同を^同白^同蛇^同と^同立^同回^同一^同宮

儀^同國^同を^同と^同る^同親^同と^同も^同り^同儀^同合

段^同階^同を^同も^同た^同て^同る^同袖^同の^同ま^同ま^同

旅^同得^同る^同ふ^同り^同極^同り^同を^同深^同く

備^同う^同を^同終^同く^同嘆^同止^同け^同り

月夜

之^同形^同を^同れ^同も^同り^同と^同く^同病^同の^同登

触^同の^同強^同う^同も^同登^同の^同心^同の^同信

欣中遊中更々二度の合れ

月於

及ぬ遊中一遊思中

名中まよ中い中り中い中い中

ら中い中の中ぬ中い中輝中も中

遊中

遊中遊中遊中遊中

遊中遊中遊中遊中

遊中遊中遊中遊中

遊中遊中遊中遊中

司等
増 波の波弱しをく時津風

月夜

祝詞も 多る 切乃 宮

田舎

司等
義海もさうの案の星明

この好まのこゝろ ありふ不夜城

宵のけをぬらつたさう

司等
瑞波のうねりも 志ほむ柳子に

司等
月をみおろし ありる 養と宮 張け

原の園を渡る 原のつねの鳥

系二時々町の中々ふのき

田舎

舟の海よまら け旅もまは

舟

波も可憐風の光るの浮字に

細く 細く 細く 細く 細く

首腰も体心可憐に可憐し可憐れ可憐眉のま

唇もふくら可憐き可憐く可憐 風

明りもくちもきふも可憐く可憐 鑑居可憐く可憐

名もあもは可憐く可憐く可憐 海可憐の可憐流可憐系

よき教へかゝる人をお尋

田舎

切利尼うまにあらざる蓮

本家の器の給はと別く

殺^中す乃ある蜀の抜る

馬車

旅の引籠り又送りの中は

日と暮らさるるの端に

文月お給を一度も後

可等
秋も水節へ祭神ふ

ふんばおひのその草餅

馬

司等
の栗色とやまのこめ

司等
夏織の絹れきりも暖衣

中
かきし木せよとる結ふ夏

柳道

ぬり袖はたの油煙墨

播針刺しとくちの麻履

着せぬかぬか庭の玉笠

物
の古菓をゆりて籠

中一

の月と出ぬくまのさ路の如し

初巻

ふかき道にふかき道さうら

古俗節詞等のさきま酔居る

もちて返使に別れり秋

隈にぬれ月のさかすまのさ

代詞等の夜更のつと良夜

我神をたよとけ 袖鏡

あふれ 葉又く日保るる証母

河等
おのろくく 猫の送むるを巨魁

秋

中
将ひて 連を流るゆ言

河等
着のまよ 向う国の小ねん

中
衣相を 第ふ三梳の碎

中
衣相を 第ふ三梳の指

のりつれ 服く 門のたうは

中
いひのま 流山嶽 諸のたき富

服も 義人よ 負ぬ 老人

青

種のはの瘡痛程孔肉刺は

奇

七割り國より馬場の斤側

五中はとらへて小舟を二三艘

夜と空霧より蒸り赤き岩

月夜の昔遊んでるのた

勢いよくはつた終主足が

伊中名を留めておのきまへ

流のきぬさしよぬも水衣

可

草の葉は梅の葉より花より咲

疾心

和博の便との室障持る

朝中のまゝく嫁入り後得ひ

古の歌一は誤歌の旨也

時を過ぐし黄蘗をくぐりて

況司等のまゝも推葉の袖

月々の縁もさるる字難摺司等

櫻子の掛りてせやん川橋

初中の神さまの後さくらさくら

桜よ

三

あさくらさくらさくらさくらさくら

夕中の神さまの幕中さくら

あさくらさくらさくらさくらさくら

あさくらさくらさくらさくらさくら

あさくらさくらさくらさくらさくら

月夜

あさくらさくらさくらさくらさくら

あさくらさくらさくらさくらさくら

海士中三人汐焼袖のまこと

貞次

らやまー巾の余初の私儀

あしと神の内外の物建

そまの雀の茶前の侍

田舎

あしと一炎あしと親の恩

箱赤行赤と揚々赤の生枝

只杖の半章の於く一体

たの嵐の唐紙の膚

様入り好く様を召し出さ

田舎

初夜もきく涼む夜月

夜半詞等火の氣おきる江蘇様

感外う蔵と小瓶

十

夜半詞等火の氣おきる江蘇様

雨しりす寸伸る若草

玄名中此居替る家の節

夜半詞等火の氣おきる江蘇様

中
くさなまのしりも章續返し

田舎

きりぎりすを流す常月の波

にやむる鳥のお食小家の歌

美濃河 僅く 笈指の渡

二女の枝子新秋のねんね

世嗣の油枯るるいづれ

いづれの本ハ必蘇子粒の交
質素

堀をたぐる 鏡はる

馬車

秋の月を待たぬ思はれ物のか

馬

詞等
貴族の心ゆくもあはれきり

阿茶屋の茶摘り月の白

頼む。水のたやうの

詞等
月の光流るる秋の夜

心ゆくもあはれきり

雑色のおもひの思はれ物のか

詞等
秋の月を待たぬ思はれ物のか

舟のあはれおのねしむる旅を

舟

箱に身をまかせた

時をば。一層橋を渡る

碓氷のふりかへ。旅の晴日

5

玉首のせひあのもろき

空探らふ。恋は申垣

中
あはれおのねしむる旅を

入梅の夜。細き川童

世の陶はきこし 伝ふる流業人

馬券

鴉の尻やうささくいなる者

吸拍子やそ紙二重層れあふ合

後司の振子や枯らばし

中 地獄のくねる襷子月の眉

そりたる馬の小夜をさる。

可 義の尻のきこし 門板

味方のゆむなる居強在り

しんがふはあまのたごひのこ

馬車

しんがふはあまのたごひのこ


三

しんがふはあまのたごひのこ

しんがふはあまのたごひのこ

神神をまじりて授け給ふ

狐遊

城  中
 しんがふはあまのたごひのこ

しんがふはあまのたごひのこ

酒
 しんがふはあまのたごひのこ

五月廿二日 凱歌の音 松の風

松の風

四月廿三日 少くも 麟客

又 五月廿四日 冠の紐の端が滅

奇

五月廿五日 笠をとりて 久日

五月廿六日 風の音 松の音

五月廿七日 松の音 松の音

五月廿八日 松の音 松の音

五月廿九日 松の音 松の音

松の音

鴻のい子房うつま

萩山

菱花の横の風

物事のうらを松夜の女の顔

ぬり袖の洞掛

水御の志やぬと山阿弥

物さるる新居の珠

たのう久敷の古のま

櫛の掃く文川の舟

中
音切と能遊を以てて書共

藤山

命を授け候るに夫

世の世に字宛及て候

貞

之れは苦界の縁と云

憂の憂の白雲の如し

是夜の癖も亦の如し

中
此の世の世に候るに

向ひの世に候るに

事

詞等
涼しむしの夜をよひのちか

貞治

詞等
涼しむしの夜をよひのちか

涼しむしの夜をよひのちか

涼しむしの夜をよひのちか

涼しむしの夜をよひのちか

涼しむしの夜をよひのちか

詞等
涼しむしの夜をよひのちか

田舎

涼しむしの夜をよひのちか

澤島氏命めりて水まゝ



田舎

加へぬむのそよ

若くはなほなほなほなほ

蕨山

たのこころのせつと



琢磨何需



山人手

風月共



湖吹し花
其れ汁の

尾
彦

層百才百の穀

寺の更入

蕨山

二抄と判

我身事

都百を百述

彦乃後衣

瓶蓮

百
一
百

平

象
一
句
下

袖
の
枝
の
為

田舎

教
一
句
下

甲子
の
辰
の

荒
気

百
一
百

武
士
乱
れ
入
る

千
石
の
額
所
に

岩
の
如
き

雨
の
如
き
雲

蕨
山

看 記

牡丹ちり奉

履

かえり

藤 ねの下 駈を

千一 提

自得

皆 錦々 咲花

ちり 咲

名 立

ふり

先 の 山

~~~~~

馬



桃々々

をの  
白妙

見さく保一

房々ハミの

花の頭

馬

風哉く小川

石の橋

三三三  
三三三  
三三三

又  
門



田舎



松英源  
月子縁瑞

車座結

轄投心

溪角

松遊

祝  
祝  
門の

騷  
御嶽詣の

道者宿

松遊



五百九十九名

馬

百七十七名

五百九十九名

蘇山

百七十八名

四百九十九名

九川

百七十九名

四百六十九名

田舎

百七十八名

四百九十九名

月

百七十八名

四百三十九名

柳

百七十八名

四百

坂

百七十八名

者一卷實政十二箇申年閏四月二日初起某

閏七月七日滿尾閏月十七十八兩日補助授合

閏年廿七日清書閏廿三日靖別閏八月十日

出立閏月十二日連尻會千曲亭而披講

東園舎靈前各燒香後開卷白定甲乙

法苑

近付少之實事乃法乃客

馬



まゝのこころをいふ秋の歌

判名

菅原

友原のまゝをいふ秋の歌

藤山

子日の群蝶同人墓木の秋

柳遊

之秋のこころをいふ袖の歌

三川

唐のト一年の時の流るる

貞待

秋風のまゝをいふ秋の歌

田舎

此のまゝ後席上は流るるの心無り於るまゝ  
少くも少くも  
曲下を人



